

研究テーマ

低学年における思考力・判断力を身に付けるための指導の工夫

提案者 河野 裕一

I 研究テーマについて

1 テーマ設定の理由

本校体育科では、これまでの研究において、思考力・判断力を高めることを中心に研究を進めてきた。その成果として、陸上運動などの個人中心の領域では、動きのポイントを知識として習得することや、自分の動きを可視化すること、ボール運動などの集団中心の領域では、目指す姿をその集団で共有することや、自分たちの動きを可視化することで、思考力・判断力を高め、結果として技能の向上を図ることができた。しかし、研究を進める中で、特に低学年の思考力・判断力を身に付けるための手立てや評価が課題となった。高学年は自分の姿を客観的にとらえ、目標達成のための方法を論理的に考えられるため、思考力・判断力の身に付いた姿や、その結果として高まった技能は明確であった。これに対し、低学年は思考と活動が未分化で、「動くこと」と「考えること」が同時に進むという実態があるため、思考力・判断力のとらえ方が曖昧になってしまったことがその要因である。このような課題を踏まえ、本研究テーマを設定した。



本研究では、多様な動きをつくる運動遊びを取り上げる。この学習は現行の学習指導要領改訂に伴い、新しく位置付けられ、「多様な動きをつくる運動（遊び）パンフレット（文部科学省）」等で多くの運動（遊び）が示されている。しかし、これらの運動（遊び）をどのように扱ったらよいか分かりづらいという理由から、教師が提示した動きを経験するのみの授業や、動きのできばえのみに評価が集中している授業など、これまでの実践で課題が多く見られる領域である。本来、多様な動きをつくる運動遊びは、児童が運動の楽しさを味わいながら活動し、結果的に様々な動きを身に付け、動きのレパートリーを増やしていくことがねらいである。ここで言う運動の楽しさとは、教材そのものを行う楽しさや、体を動かす楽しさだけではない。児童自身が、楽しく活動するための方法を考えることも重要な要素である。そして、この「楽しく活動するための方法を考えること」が本研究で目指す思考力・判断力が身に付いた姿である。しかし、低学年という実態を考えると、漠然と運動の楽しみ方を考えるように提示しても、その実践は難しい。そこで、動きの工夫の仕方を考えたり、友達のよい動きを見付けたりと具体的な活動を提示することが、低学年において、思考力・判断力を身に付けることにつながっていくと考え、そのための指導の在り方を追究していく。

2 テーマにせまるための方策

視 点 1

動きの工夫の仕方を考えることで、思考力・判断力が身に付けられるようにする。

〈手立て〉

- (1) 動きの工夫の仕方を考えられるようにするために、単元前半は、各運動遊びの基本となる動きを習得したり、動きのポイントや工夫の仕方を理解したりすることができるようにする。そして、単元後半は、これまで経験した動きを基に、自分なりに動きを工夫する場を設定する。
- (2) 動きの工夫の仕方を考えられるようにするために、「発見カード」を作成し、児童が考えた工夫した動きや、ペアの動きから見付けたよい動きを、毎時間の振り返りの際に書き込めるようにする。
- (3) 動きの工夫の仕方を考えられるようにするために、工夫の仕方を「動き方の工夫（例：反対の方向へ、姿勢を変えてなど）」と「活動の工夫（例：人数を増やす、競争するなど）」の観点で焦点化し、それぞれの運動でどのような工夫ができるかを示した掲示物を掲示し、活動の際に常に見られるようにする。また、児童が考えた動きの工夫の仕方を写真やイラスト、動画として記録し、その児童のオリジナルの名前を付けて掲示、蓄積していくようにする。

視 点 2

友達のよい動きを見付けることで、思考力・判断力が身に付けられるようにする。

〈手立て〉

- (1) 友達のよい動きを見付けられるようにするために、単元を通して同じペア、グループでの活動を中心に学習を進める。そして、ペアやグループのよい動きを見付けられる時間を「発見タイム」として単元後半に設定する。また、ペアやグループのよい動きを互いに伝え合うことで、工夫した動きとして共有できるようにする。